

和田節定編輯
開明小說

春雨文庫

第四號
下



A416
8

春雨文庫第四編卷之下

東京 和田定節著述

第十四回

吉野よしのざくらさくらの吹風ふかぜの除よけても花はなのうつらひひて今いまと
 盛さかりの八重やへ櫻ざくら八重やへ山やま吹ふみ梨なし李なしの花はなも世間せけんの春はる
 み似おぬ沼ぬまと埋うめての家いへとたて田とと潰つぶして町まちみ為い
 て開ひらく港みなとの繁さか昌さかふの西洋せいやう各かく國こく亞米理あみり加か入い芥子かいし

48-7526

坊主黒ン坊本朝諸國の高法人外國館と見物の
道者入り込む朝夕賑をひ増して家増せを樹
木と植る寸地のをけれど愛るみ餘る春の日の
色香と所不やい過んと思ふ心り花瓶小櫻海棠投
げ込と一間の山手海の景見をら一清きも障子
とて切り二種三種の肴酒おきても話しみ猪
口と取り箸ととりさへ忘れとるの渡邊吉太郎
と中村お梅のさし向ひみて野毛の四辺りへ新

春雨四下

築の家の二階と知られとりお梅のなはれ一髪質の
毛と前歯でフツリ啗と切りるぐる吉太郎の顔と
覗き込とアノラ夫でハ松下亭の二階へ来て話して
居とのが真正で京都へお出るさらるけれを成
らぬいと一息と吐て居る吉太郎の天窓と
搔きまぐる「自己由太平無事のとときで騷がい話
しぐるののなら些や拵つと身分が昇るくると言
て生れ故郷と遠く離れ京都あとりまで往の

獨身どくしんで居おる時ときでさへ否いやみのどりのヲ増まて子安村こやすむらの
雨あまやどりみ女房にようぼうと一入ひとりの見みつけて見みりやア間まも無なく
呼よび迎むかえるみ志しと所ところが二月ふたつきと三月みつきの書状ふとと寫真しやん
で樂たのしんで居おるみけれを成ならるいのどからよ慾よくふも
德とくふも替かえられいずい否いやどが水戸みづとの御隠居ごいんきよが鶉飼うぐい吉きち
左工門ざぐもんなるいのい言いふ藩士はんしと京都きやうとへ上のせ安島帶あたま
力ちからふぞと腹はらと合あせ公家衆くわがしゆうのこをと持もてこ以この來く
薩州長州土州さつしゅうちやうしゅうとしゅうその外ほかの藩士はんしが京都きやうとへ入いり込こえ

長門四下二

横濱よこはまの港みなとと潰つぶすの赤あかい髯ひげの奴やつらと追おひ拂はらふのと
言いふ騷さわぎが發はり水戸みづとの屋やき下したの當主とうしゅと隱居いんきよ
の中なかが割はれ藤田ふじた込こ結城ゆきぎ込こと二立ふたたちみ成なり同士どうし
うちと押おむかつつめ京都きやうとでい日々あちち夜やふき切きり張はつ
とりの強さぎさいあり薩州さつしゅうや長州ちやうしゅうでい外國人こくじんと戦せん
争せうと始はり昨日きのふふ今日けふと血腥ちみまくさるよ世よの中なか去さし
外ほかの所ところ何様なにかでも宜よろか京都きやうとの天子てんしさまのお膝ひざ
元もとそのお膝ひざりこが此このじろの様やう又また騷さわがいく成なて

何時京都ふ軍が始まらぬとい言ぬちる守護
職の會津侯や所司代の桑名侯の人数とま
警衛ふ力と盡されても諸浪士の勢ひ強大
中く防ぎかねるふより此度出来と見廻組ハ事宜
よよると刀ざんまい切の突の強きもせね成
らぬ役向きまぢも剣術の出来るとの残撰
言ひ附るつけ梅ア、まア待て下さいよア夫下ハ京
都へ浪士が集まり九條さぬの御家来と切たり

足利將軍のお木像の首と切とりやるので其様
る乱暴な強い人達と捕えるお役と見廻組と言
るので座いますノ、ウム左様さ、夫ぢやア此方らで
捕えやうと考へたら向ふで不動してハ居まら
い刀と抜て切てかりませう、刀も抜ごらう、食
ひ付も為るごらう、引掻も為るごらう、サ、其様
なところへ往のハお止なさい、祓へ、ア、ハ、否せん
る死介る場所ごらう、断りか言へ祓へのヨ、殊み出

來も志ねへ劍術どけれども此方へ來て教授と
 恃むまど言れて見ると煽動られるとい知り
 るぐら少しい其氣も成る奴サ一砲術がこの菊地
 さんのお話しで此方らのお頭の京都へ遣る
 と金武場の劍術も上手が無るから渡辺の京
 都へ遣らぬと被仰てございますトお頭も左
 様いつく下さる一自己も往き度多いと思ふが
 横濱く見れが二倍も三倍も血腥く成て居る

長門同下四



ところどけ夫と無理ふ
 断るゝ身怯の様と思えれ
 るも恨もど一又寺岡

平右衛門の言ひ草でいそいそ幾何小祿の身で
も先祖くろくして續と命重くも軽くも御恩ふ二
ツの無いと思ふと今徳川のお家の大事の秋も當
り雑兵の雑兵どけの力と盡さねとならぬ故何
様でも京都へ往ずの義理が立まいと思つて居る
のサ梅さうな嘘き申せむ何程貴君と彼方へ上る
のか否いやとて手前勝手ふお止め申しは為ま
せんが京都み浪人者より強い否いやなの澤山居

ると言ひ升から夫が案トられて往ませんワ吉浪人よ
り強いと言ふの何なんどらう公家衆梅ワエ吉をて何
が強いのだらう梅鴨川とやら水が宜いので京都の
女の色白くつて肌が綺麗きれいと言ふで有ありませんワ
吉「其様な話」どか何様なんゆりので有ありう梅「夫どの
み詞ことばくろく取りまをしやさくつと男おとこと湯ゆすのが上
手う下くだびびぎぎいますと吉「其様な事ことりも知れしらへし将
軍家の御上洛ごうらくふお供ともとして往ゆきあ彼地あつちみざん在勤ざんきんとして

居ゐりのの元もと天あま窓まど白しろ髪かみ親おや爺ぢの嫌きらひるく片かたツつららく
女とんまふをままりり申まう一つひ訳わけの無ない人ひとむむりり多おほううつつとと言いふま話な
一あ下した有あららくく一あ夫それ上かみ方かたの女とんま江えど戸どの男おとこの無な否いな
味あじとと一あ氣き前まへふふ惚おぼれ江えど戸どの男おとこ上かみ方かたの女とんまの優やさしい取と
りまいい一あ惚おぼるるとと言いふまでで一あ有あららまませせんん一あ此こゝろ二ふた其その様さまな
氣き味あじが有あるるも知しれれ移うつるるが残のこららず左さ様さまと一あ訳わけも
往いぬぬへ一あ夫それどどけけもも江えど戸どで女とんまふ好すれれるる様さまな男おとこ
一あ京きやう都との女とんまも矢や張ちやう惚おぼまますすどどらら一あ声こゝろままアア理りと押おして

見みれれば其その様さまなののどどららく一あ女とんまの方かたで惚おぼて優やさしいくく志こゝろ
とら男おとこの方かたでも惚おぼるる氣き又また成なりりまますすどどららく一あ其その
處こゝろが人情あまのこころどどららく根ねと掘わり底そこと轉ひ倒たかへへと一あ嚴きび
一あ尋たづ問ねふ出でッッかかををすすりりののどどらら一あ言いへへどど一あ梅うめの真ま
面おもて目めみて吉きち太た郎らうの顔かほと志こゝろいいつと見みははめめ哮あと息いき吐つ
一あ夫それどどから浪なみ人ひとよりより一あ強つよいいと一あ言いふまで一あ有あららまますす一あ京きやう
都との女とんまがカか一あ太た貴き君くんがああつつちちへおお出いるるさされれを直すみ女とんまが
惚おぼまますすくく左さ様さまををるると一あ貴き君くんも又また彼あ方かたの女とんまふふ一あ惚おぼ

みさうり此方らの事なぞいお思ひ出しも成さるまい
それ夫のモウ何様ふ水性とみさうらうと貴君ふ女の惚るの
へ吾侪の身ふとり嬉しい事下り有まにぐ吾侪とく貴
君の女房あいて遣るとおつてやつても親父さんや慈母さ
んが承知下お姫成と訳下りるゝ貴君の女と譎すの
がお上手どとの皆さんのお話一為て見ると當座の気
やすめ嬉しがらせて置いて下さるのりも知れぬと思
へむ吾侪ふい薩州や長州の浪人より京都の年増や

新造の美女がまてふ否何より強うございますわ
入り組ど玄関つきで氣楽な事とて居らア夫より
う自己の了簡ぢやア何程親類の中どううとて松
下亭へ置ちやアお前がどんく水性なとて覺え情男む
うり拵へると言ふ評むんどく早く引取て仕舞う
と思つて居るのどが左様まるふい江戸の両親ふも一
應話一ぢいお前の親父さんや慈母さんふも話一
とまらけれを成らず為るく菊池さんが江戸へ

往ゆと言いふくく頼たのんで遣やうと思おもつて居ゐるのど併まじ其間まふ
お前まへふ水性すゐせいとされ人ひとは横よこ取りでも遣やられちやア堪たまら
ねへから毎日まいにち松下亭しょうとうへ往いたり彼様あつちしく呼よび出いしとり
して附つて居ゐる奴夫やつそれどから上方うへがたへでも往い日ひの貫くわんひ請うけ
て志こゝろまひ是これで宜よろしと胸むねと撫なで出い雲ぐもの神かみを表あらわむき脚あし
厄やく介けと掛かけてくく出い立だせり積つり何様どうして松下亭しょうとうのや
うみ通人つうどんをくり出い入りとする泥水どろみづ同前どうぜんの所ところへ置おいて往いれ
るものり夫それこそ自己おのれの為ためふやア松下亭しょうとうへ飲のみ来くる好男こうなん

子この諸浪人しよらうじんより気味きみが悪わるいやア梅うめア吾侪ごちがが水性すゐせいと為なる
と言いて誰たれが何処どこで申まうすくく吉きち言いはる祐すけへが言いふとらう
と思おもつてから言いふと言いふのサ浮気うきとしく確たしかな証しやう拠こと知しつ
て居ゐるか子ことゆてお梅うめの真赤ましかも成なり「吾侪ごちがが水性すゐせいを
しく証しやう拠ことびざんとて座ざの井いとエ「知しつて居ゐるのサ「梅うめ
其確證そのしやうこと早はやくおつ「やつてゆせて下くださいましく「言いひませ
う然しかも春雨あつさりめのあつり降ふる夜よ「梅うめの春雨あつさりめの降ふる夜よ「何様どう
「ましく「小安村せいやんむらの婆おばアやアの家うちで水性すゐせいとしくのと慥たしからみ

あつて居るのサアアレマア彼が水性と言ふの下座にますり
一訣らざア宜よう折から二階のつひ下と往來の人の話
声いよく京都で攘夷鎖港の論が沸騰あがり何様
でも戦争の始まる模様夫はいて今度出来と見廻
り狙とりの強い人むり撰むの下此地の劍鎗の誓古
場金武場くも手利むりぐ撰り抜れ二三日のうち
み京都へ出立するさうど女と軍と為るのあゝ鼻と
分捕とる位で濟りく宜グ男子とるしの軍のれめんど

千人万人敵と討とり高名ても一度手前が討取られ
りやア夫でお仕舞自己まんざア何程お金と貰つても一
ツ間違へば切とりむつたり為る様々所の真平どアと使
さへ哀しい辻占とお梅の目りとみ泪と浮め吉太郎の顔
とジイツと見つめ思わざ溜息はくろるべー

第十五回

茲ふまゝ書肆俵屋横田清兵衛の妻お岩の夫の行ひ
の此程み至りまゝ隠すと多きと案ト勤王とや

の人ガ折々守護職や所司代の手ふ捕えらるれを其
浪士とちの若や夫と同盟とやらの仲間で夫のこ残
言ひとてたら夫も又捕えらるるゝ必定と言ふて小
常あんどの事ふかこつけ包を隠してお在る傍ら
らくちの出様もるゝ彼振る時あゝ平時信心の北
野の天神さるへ御願とけ夫の無事と祈るより外
、そいと女乞の一心より幼稚き子供ハ姑や妹お樂と
寝ると僥倖晝間の家事の用果るとまぢ毎夜ひそくふ

道の遠きも淋きも厭えず北野の天神の社へ参詣
なゝ夫の身の上の無事平穩とぞ祈りける然るみ終
屋寅吉ハ横田清兵衛がまぢ小常お現とぬり自家
おの半日とも居らぬと附けこそ日々横田の家へ訪
れ来て間がる暇がるお岩と挑めどお岩ハ清兵衛が
身の案トらるれを一人おでも悪まうとてハ害の片端と
ろろんお計られずと思ひ風又吹く青柳の餘所よ
流し置と以て寅吉ハ宜氣ふるり考えて見てお

ぐつと自己惚か岩の何様でも僕も北山時雨濡て見
といと思つて居るのへ目元の紅葉の色も現はれ通
天橋下詠めさよりも確どが何と言ふも清水の音
羽の滝より細りしと女子んと来て居るうら何ぶ
此方が香りの宜い稲荷山の松茸どとして多い入目の
黒谷と忍んで一寸あゝ坂の関路と迄は往ぬの道理
此方もまゝと老婆どの妹どの下婢どのとらゝ邪戸も
のが居るのであるもぐ口説訳も往ねへかゝる小ぢれつ

とくつと成らなかつとが此程お岩の毎晩どこへり出
りけるうら段々探索してえらうら北野の天神さまへ
参詣の往ぬ違ひるゝ其参詣の元素ととせは梅と
一生絶ますから清兵衛とよりて寅さんと偶して下さ
いと言て願ふのりも知れ多しと思ふと塊へ雲がたつと
様み暗くあり又湯下蒸しと様々煙が出て来て居ても
立ても落着ぬうら今夜下三晩うらして北野の境内の
人気をえられと一所に居て奴れがコロク遣て来るのと押

へと區まづ蚤あもと思おもひの外ほか松まつふく風かぜの音おとむりり姿すがたの現あらえ
れ見みえぬみ閉と口くちハテ今いま鳴なる鐘かねの戌いづ刻ときどが又また待まち不なうけ
と食くつととと往おき來きの入いの足あし音ねみ耳みみと聳そと目めと配くわい
り折よくホツと溜ため息いきと嘯うき立たる寅とら吉きちの居ゐるとも知しら
ず清せい兵べい衛ゑいの妻つまのお岩いわの宵よ暗やみの空そらより闇くらき氣きの曇くも
りと僅わずかく又また照てす提てい灯とうの光ひかりり又また道みちと端はたりツ來きか
ままの下した蔭かげより冠かむし手て拭ぬぐ取とりのけいで「俵たわ屋やの内うち方かた
モお岩いわさん何ど方ちらへと言いひるがう突ぬつ然と立たち出でる寅とら吉きち

み折とりあしと思おもひるがう流た石いしみ逃にげても往おれねむ立た止と
まりて莞あつ示し笑わらひ「オヤ寅とらさんやございますう何ど様ようして
今いまごろ此こ様ようるところみ提てい灯とうもなくお在いののお待まち合あせ
のお人ひとでもほ座ざい升しやうト言いれて寅とら吉きち天てん窓まどを撥はき「
イヤ待まち人びとの大おほありで氣きをくり揉もて居ゐとのどが夫それより
のまアお前まえさんの此こうを淋さしい夜よるの道みちとお供ともも連つれ
何ど地ちらへお在いのの座ざへやすト聞きれてお岩いわの口くち隠こもり
「ハイおのヲ清せい兵べい衛ゑいが此こ先さきのアノヲ別べつ當とうさるのお家うちへ

上りお酒と
 戴いこと見えて何り
 知らぬが用どろろ



一寸来いと言ふ手紙と此通りと帯の間へ手と入れ
 少一探一兩ニ家へ忘れて来とッけアア夫でか別當さ
 まの所へ往のさ今頃ふ成り困るぢやア無いうねへ
 とい世と忍ぶ仮の名で實の何と本名が有りさう
 な 誤関兵衛のせりふ下いぬいガ供とも連ず只一人
 と来てその上あ一体そさぬの風俗の前垂けけと言ふ
 のが怪しい何でも私の考えぬの当社天満大自在天
 神さまへ御願をかけ梅と一升一斗一石命の限り根

かぎり断つらものみし仕し舞まにうら今いまさう何なんとも水みづ
性せいらういけ其そこ処ところが思し案あんのわりの迷まよひ何どうぞ卒つひ出で雲うんへお使し
者しやととて彼あの人ひとと何なんして此この人ひとと何なんして下くださるゝぞと言い
ふ頼たの母ぼの意いき氣きる思おも召めしるのでございませうがへん
お隠かくしあらざと一寸ちゆうとくお話わしるすつと方あたが近ちか
道みち此こ處ところで彼か様さまへお目めみうるも貴あま女ごの御ご願ねんが屈く
くお引ひき合あひ合あひせで座ざいませうモシ著ちゆうしる御ご利り益やくる
こ有り難あいものて座ざへやす祈いのへと聞きてお岩いの

笑わらひみつらう「お寅とらさんと」ととく何いつ時とき變へらず戯たわ
言ごをッかり其そのよの玄げん氣きと見るみつけ吾ご儕しの様ようも老らう婆ば
アみるての往ゆきませんまア早はやく往ゆきで天てん神しんさぬお若わかく
ある様ようもお願ねんひ申まうしと来きませうとどが遅おそくみるト天てん
神しんさぬより内のうちお酒さけ好ずき極きん又また嘖いられるか左さ様よう
らむ寅とらさんと往ゆきかへるお袖そで引ひき留とどめ「是これはまア何なん
様ようの十七じち八はちの新しん造ぞうのやうにお耻はといと云いふ訳わけが
らみても有ありやすめ人ひと何なん處ところも尋たづねて人ひと目めみかへり

さうも祓へ濕然と〜と小座敷のゐる茶屋へあがり
媒妁のりずの相互ひみ敵と仕合の三々九度など
濃てり往すとも浅り二人りて飲の宿祢當麻の躰早
の取組がやつて兄とさの身の願ひさく一所み出
るせへト言ど此方の取りあはず何とよ寅さん小
ンニ酒ツくさの酔ておいでのと子さく鬼子女神
さまの様ふ子供の有るお婆アさんと捕えて愚弄
と祇園町で待て居ませう早く往ておあげなさい

吾侪も餘り夜が更ると悪いから何の用とらめて
來ませうアレサマア杖を放してと言とらぬ振拂ひ
ても狛ひき止め身体を傍へ摺りよせて一是の志
お岩さんと為とてが彼様うち付謎とかけても心
で解て表べふの解ね振りして憎らしい夫のなる
ど泥水の中と揺とさる猫や狐の連中でも惚と人
の耻うしので十分口がきけぬと言ふから年増盛
のお前さんでも世帯固氣のお内茂さんるゝ意の道

あの新造しんぞどうぜん去來いざとるると平常へいじょう思ふ半分はんぶん分
も往ゆず尻しりぶとるさるの無理むりでもをいがまア考かんえて
内うち説せつ卜うらろ且かつ那なの毎日まいにち毎夜まいや毎朝まいあさ毎まい夕ゆふ夕ゆふ緩ゆるくと先まへ
計町けいちょうの藤村とうむら樓ろうで小常せうじょう鼻毛はなげと伸のびすと鯨尺くじらぢやくぶ
指さて三千さんぜん丈じょう鶏卵けいらんと鰻うなぎの常食じょうじきでも大陽たいやうさまの琥こ
珀はく玉ぎよ黄色きせきよんえるお樂らくしと何なんとまアおろろ山吹やまぶきお
庭にわの櫻さくら大おほろ根ねびきよ程ほどもあるまの丈だけと貴女あなたの
常盤本じょうばんぼんの松まつの操まわらひまんざら又馬鹿ばからしくつて守まもれ

ねたんづ内端うちへだも大おほがい程ほどが宜よろいサア一所いしょにお出でるせへ
無理むりお手てと採とり引ひをれをお岩いも今いまの堪たえかね主ぬし
ある者ものと捕とらえて淫奔よんぽんがたしき振ふるまいの何事なにごとありや
と言いんとせし古ふるくよりして朝夕あさゆふお家いへへ出入でいりりの寅吉とらきち
お名な若わかも夫ととの密事ひそごとと心こころづきて有あらんあ破やぶれの端はたと
も成ならんうと思おもふよりして是これまでお辛抱しんぱうをこると今いま
茲ここぶ耻はかして詮せん無ならんお腹立はらたしこの胸むねを振ふるで
おホくおんお寅とらさんのお言いの通とほり内うちで日ひ又また毎まいお

ちの出であるきでお酒さけ狂くるひや女むすめぐるひ何なん程ほど男おとこの働はたらきで
もあ餘まりどうい思おもひけれどもあ夫おつと張ちやう内うちであ苗なえちのむんササ儀ぎ史しどい何なん
様よう考かうえてもあ損そんどうくく此このじろふふ芝しば居いでもあんん又また往ちきま
せう其その時とき何なん卒そつ連れんて往て下さいナナ彼あ言いふ場所しよへは
ひひ一いつ往りと事がそいいのであ此このもも容やう子すを知らるいから
ササ今こん夜やのあ茶ちや屋やのお時ときまでおあ預あけみりておいて
早はやくお別べつ當とう所しよへ往き用のよ度どとばらいと氣二き掛かつて
落おち着つるいくく何なん卒そつ放はなして下さいし言へど取とりたる手と

故こさば倍ばい傍ぼうへまりようて「黄おま前まへさんさんのか方ほうでも其その心こころ底ぞこと
徐そ々と現あるかけて下さりやアア私こも實をふ打ぶまける噂
つつ仕し舞まふか見み栄えのいとこ何なん様ようしとこやら知らる
いいがお前まへさんさんが不斗とようくまり惚とわの字が胸へ一目めみ
漆し之こ徹とり思案いの外の横戀よ慕ねんでも豎たてよかぶりと振
せせいいと思ひて茂しげ々お宅たくへ上れど姑あ婆やうさんやおあ楽らくささ
んお飯まん林ま火まで邪々おろろ異あつつ緘くんど掛かことや色目いろめ
と遣ふか精せい一いつをい是これ下の蔭かげの無多むこがれ何卒なんそつ人ひと目めの



るの所ところで杖つえ一ひとをいよ口説くちどいて見みしと思おもひねん念ねんが居ゐい
たり嗅く出いしきる北野きたのの夜よ參まり是これ僥倖きやうしやうと今日けふで三晚さんばん
待まちりひあり宜よい首尾しゆびと芝居しばいの時ときまで延のされませう
サさアあ出いと手てと採とッり引ひき立たて往ゆく男おとこの力ちから何なんと詮せん方かた無な
き後方うしろよぬくと立た侍さむらい物ものとも言いす寅吉とらきちの衫えんぎ首握くびにぎ
んでッでッでンん嘯せう松まつの根元ねもとへ投な出げせを寅吉とらきち仰おほ天てんアあ痛いたタたと
弱よわりまグぐも起お上あり彼かの侍さむらい向むかむんと為なる時とき又またも松まつ
蔭かげより現あれ出いる侍さむらい一ひと手てと差さし伸ので寅吉とらきちが二ふ腕うで取と

るよととええととししガが助斗すけたけうとせて又また轉まく投付なげつけられ
寅吉とらきちへへてりや堪たまらぬと天窓あままとかへ一日いちにち散ちふ逃のがさりり
か岩いわの地獄ぢごく下した佛ぶつの思おもひ謝あやと言いんと為なししる時前ときまえの
侍袖さむらいそでと振ふり早往はやゆけくと知しらすれを辞宜しよぎと為なる手て提て
灯あきの光ひかりりと袂たもとふ掩おほひり足音あしな隠かくして天神てんじんの社やしろの方かたへ
ぞ往ゆくりける後あとから出いで侍さむらいが四辺あつちと窺うかがひし桂小五郎けいごろう
君くんうと問とむ此方こなたの侍さむらいも声こゑと竊ひそめし中村半次郎君なかつむらじろくんうう嚙さ
お待まちかねで有あつつららうう中ちゆう何僕なんがくも只今ただいままま人ひとししととろ

シテ^{シテ} 俵屋^{たわや}の清兵衛^{せいべゑ}ハ^ハ 桂^{けい}テ^テ 頼^{たの}ト^ト 通^とリ^リ ぬ^ぬレ^レ 最^も
 ナ^ナヤ^ヤ 程^{ほど} 多^{おほ}ク^ク 参^まル^る 下^{した} 下^{した} ざ^ざら^らう^う 只^{ただ} 今^{いま} 君^{きみ} の 投^なゲ^ゲ ぬ^ぬヒ^ヒ 所^{ところ}
 男^{おとこ}ハ^ハ 桂^{けい}ノ^ノ 知^しラ^ら ね^ねド^ド 清^{せい}兵^{べい}衛^ゑ の 妻^{つま} の お^お 岩^{いわ} あ^あ ら^ら ん^ん う^う と 思^{おも}
 ふ^ふ 女^{むすめ} へ 横^{よこ} 意^い 慕^ぼ と^と ろ^ろ う^う 野^や 良^{らう} 由^ゆ 名^な 清^{せい} 兵^{べい} 衛^ゑ 又^{また} 多^{おほ} 多^{おほ} 代^{しろ} り^り
 寸^{すん} 懲^{ちやう} して 遣^や つ^つ 所^{ところ} の 所^{ところ} と 僕^{おれ} が 外^あ 焼^や 下^{した} ま^ま と 轉^{ころ} ぐ^ぐ と お
 笑^{わら} へ^へ 此^{こゝ} 方^{かた} も 共^{とも} 打^{うち} 笑^{わら} ひ 木^き 蔭^{かげ} に 寄^よ り^り て ぞ 立^た ち^ち け^け る

春雨文庫第四編卷之下 終

関明 第四編より 近世の烈婦孝女乃傳説と
 小説 引續き出版 記しる面白き珍書あり

松村春輔編輯 初編より 出版
 復古夢物語 八編まで 出版
 這ハ明治太平記の前篇ありて嘉永
 六年亞米利加使節相州浦賀へ來船
 以來明治元年伏見戦争迄委しく
 考ふる面白き書也

和田定節編輯 半紙本
 参考鹿兒島新誌 初編より七巻 此書西国征討の始末を詳細に
 述べて第一の實録あり

東京書肆 大島屋 武田傳右衛門
 弥左五門町二番地

010190509490

